

生成発展への方途 — 松下幸之助にとっての SDGs

事業は社会を生成発展へと導く手段である。

パナソニックミュージアム

恵崎政裕

「宇宙に存在するすべてのものは、つねに生成し、たえず発展する。万物は日に新たであり、生成発展は自然の理法である。」

パナソニックの創業者・松下幸之助(1894～1989)は、事業家であると同時に思想家でもあった。ここに引いた文章は、思想家としての幸之助が人間研究を重ねた末に辿り着いた宣言文「新しい人間観の提唱」の冒頭を飾る一節である。

宇宙を構成する森羅万象は絶えず生成発展を繰り返す。その中において、宇宙創造の根源の力から至高の能力を与えられた人間は、衆知を結集して万物に秘められた潜在力、可能性を引き出し、物心一如の繁栄を現出していかなばならない。それが人間に課せられた天命である。

こうした人間観を幸之助が世に問うたのは

1972年のことであるが、それより40年前の1932年、彼はその萌芽ともいえる「産業人の使命」を自覚している。時に幸之助37歳、松下電器を創業して14年を経たことであった。

使命を知る

1918年の創業以来、幸之助は業容拡大とともに事業家としての使命感を日々募らせていった。それは、まず1929年に「営利ト社会正義ノ調和ニ念慮シ、国家産業ノ発達ヲ図リ、社会生活ノ改善ト向上ヲ期ス」と謳う松下電器最初の綱領として明文化される。そして3年後の1932年、いよいよ真使命を知るのである。使命を知った——この自覚を幸之助は「命知」と呼んだ。

春3月、知人に誘われて奈良県の天理教本部を訪ねた幸之助は、無償の奉仕活動に喜びにあふれて精を出す信者の姿を目の当たりにする



思索の場であった京都の別邸・真々庵の庭を散策する幸之助(78歳)

